

漫画『馬田行啓と小野光洋』

—教育に情熱を燃やした文教大学学園の創立者たち

第4章 「私学振興と社会に貢献する人材育成をめざして

文教大学学園の誕生」解説

一 戦後における立正学園の発展と後継者・小野光洋

一九四五（昭和二〇）年は、立正学園の長い歴史のなかで転換点となった。戦災により校舎が焼失したほか、創立者である馬田行啓が他界したためである。この時校地は二〇〇〇坪、生徒数は二〇〇〇人に達していたが、戦災により校舎の九〇％を焼失した。

馬田の遺志を継いで学園を再建したのは、ほかならぬ小野光洋であった。小野は、後に総理大臣となる石橋湛山（写真1）に学校再建を相談するのである（田村茂撮影『現代日本の百人』文芸春秋新社 一九五三年）。



写真1：石橋湛山

まず、小野が着手したのは、校地を確保することであり、品川電気、池貝鉄工所からは青年学校の校舎を譲り受けることとなり、日本光学工業からは翠光寮を借用することができた。

現在の社名が判明している会社を紹介しておく、池貝鉄工所は、一八八九（明治二二）年に池貝庄太郎が創業し、工作機械のなかでも旋盤を製造した会社であり、現在も株式会社池貝として存続している（国史大辞典「池貝鉄工所」）。また、日本光学工業の設立は一九一七（大正六）年にさかのぼり、現在の会社名は、世界的な光学機器メーカーの株式会社ニコンである。

このように、学びの環境を整備したのち、小野は、一九四六（昭和二

一）年に立正学園理事長に就任するとともに、立正学園高等家政学校と立正学園高等女学校の校長を務めた。なお、小野の経歴については、特に断りがない限り本学ホームページを参照した。

<https://www.bunkyo.ac.jp/academy/history/founder/>

戦後改革により学制が大きく変化するなか、一九四七（昭和二二）年三月に「学校教育法」が公布され、いわゆる「六・三・三・四制」が導入され、修学年限が小学校六年、中学校三年、高等学校三年、大学四年と定められた。教育制度の抜本的な改革にともない、同年に、小野は立正学園中学校、立正学園石川台中学校の校長に就任した。さらに一九四八（昭和二三）年には、小野が立正学園女子高等学校、立正学園石川台女子高等学校の校長に就任した。

一九四九（昭和二四）年には閉園中であつた立正幼稚園を再開したほか、一九五一（昭和二六）年には立正学園小学校、立正学園溝の口小学校（写真2）を新設し、小野は校長に就任している。

一九五一（昭和二六）年と言えば、日本がサンフランシスコ平和条約（写真3）を締結し、連合国軍による占領が終了し、日本が独立を回復した年である。

このように、小野は、戦後改革で諸制度が変革するなかで幼稚園・小学校・中学校・高等学校を急速に整備し、戦後の立正学園の基盤を形成したのである。

一九五一（昭和二六）年、小野は馬田の死後七年目の集いで、馬田に対し「私共の畏友であり、師であり、指導者であり、又偉大な教育者」であると最大の賛辞を贈るとともに、学園のさらなる発展を力強く表明している。なお、畏友とは尊敬する友という意味である。



写真2：立正学園溝の口小学校



写真3：条約調印の様子

不幸、戦災で大半を焼失し、また先生の急逝に遇ひ、学園の再建も多くの障害に直面しましたが、幸に、今日教職員の団結と父兄の協力によりまして、着々と新校舎を建設し是に、石橋湛山先生を会長として、立正女子総合学園の建設事業に邁進することになりました
立正学園『馬田行啓先生追憶抄』一九五二年、一八ページ。

このとき小野が言及している「総合学園」とは、具体的に何を指し示しているのかは判然としないが、これ以降の学園の歴史を鑑みれば、短期大学の設置を視野に入れていることは明らかであろう（漫画本編六四ページ）。

戦後の混乱期に幼稚園から高等学校の各校を整備したほか、そのうえで短期大学を見据えた学園の将来像が、ここに初めて示されたのである。



二 私学振興の旗手としての活躍

小野の活躍の場は学内に留まることなく、学外でもその名前は広く知れ渡ることとなる。一九四六（昭和二一）年に、小野は東京都私学協会の常任委員、日本私学団体総連合会第三部長に就任した。日本私学団体総連合会とは、教育に関する調査研究、学問研究および教育振興、私学振興に必要な活動および私学の運営にかかわる協議をする団体であり、そのなかで第三部は中等学校が加入する部会であった（日本私立中学高等学校連合会『二十年史』一九六七年、四〇ページ）。

さらに、一九四七（昭和二二）年には、日本私立中学高等学校連合会の理事長に就任するなど、この時期に私学の地位向上の旗手として活躍す

るのであった。

一九四七（昭和二二）年四月、第一回参議院議員選挙に出馬し、参議院議員に初当選した。一九四八（昭和二三）年、小野は、第二次吉田茂内閣の文部政務次官として私学予算の獲得や、いわゆる「私学三法」※のうち「私立学校法」の成立に尽力し、国政の舞台でも文教関連法の整備に注力した（漫画本編六〇ページ）。

- ※①「私立学校法」、②「私立学校振興会法」（一九五二（昭和二七）年三月・法律第一一〇号）、
- ③「私立学校教職員共済法」（一九五三（昭和二八）年八月・法律第二四五号）。

（写真4）歴代首相等写真【憲政資料室収蔵文書1-42】

ところが、一九四九（昭和二四）年一月に法隆寺金堂の壁画が焼失し、その責任を取るたちで、文部政務次官を辞任している。小野の参議院議員としての活動期間は、それほど長くはなかったが、短期間のうちに私学振興関連の法令を整備することができたのは、小野の私学振興への並々ならぬ熱意によるものであった。

一九四九（昭和二四）年二月一日、小野は、第六回国会参議院本会議において「私立学校法案」について次のように発言している（傍線は引用者による）。

私は只今上程せられました私立学校法案につきまして、賛成の意を表するものであります。そもそも本法案は私立学校の自主性を確保



写真4：吉田茂

し、公共性を高揚すると共に、憲法第八十九条の下において、国又は地方公共団体が私立学校に對しまして財政的援助ができることを可能ならしめる、いわゆるさような目的を持つて立案せられたものであります。

(中略) 而して本法案はその第一条に示されておりますように、先ずその自主性を進め、公共性を高揚し、且つこれによつて私学助成の途を開きまして、これが健全なる発達を図るといふ趣旨によるものであります。誠に當を得た立法法であるところ存するのであります。

<https://kokkai.ndl.go.jp/#/detail?minId=100615254X02319491>
201&spkNum=1&single



したがって、小野は私学の自主性を担保するとともに、公共性を高めることを法案成立の目的と発言している。答弁において二つの意味するところは明確に述べられていないが、自主性には、特徴ある教育方針、校風のもとの自由な教育、そして公共性とは私学といえども教育機関の一部として社会に人材を輩出し、ひろく社会に貢献するという強いメッセージが込められているのである(漫画本編六一ページ)。

つまり、馬田の日蓮主義に基づく「実践性」に基づき建学し、それを受けて小野が私学全体の「公共性」を表明している。馬田と小野はいかに時代が変化しようとも、教育による社会貢献を常に意識し、立正学園のみならず、私学の発展に寄与したのである。

最終的に、私立学校法案は可決され、一九四九(昭和二四)年一月に「私立学校法」が制定されたのである(傍線は引用者による)。

第一条 この法律は、私立学校の特性にかんがみ、その自主性を重んじ、公共性を高めることによつて、私立学校の健全な発達を図ることを目的とする。

https://laws.e-gov.go.jp/law/324AC0000000270#mp-Ch_1

参議院における小野の答弁の趣旨が、そのまま継承されるかたちで、私学の「自主性」と「公共性」を重視する考え方が、私立学校法に成文化されたのであった。

三 立正学園女子短期大学の設立

一九五三(昭和二八)年、立正学園女子短期大学が設立され、小野は初代学長に就任した。

小野の念願であった「綜合学園」が、ここに実現したのである(写真5)。



写真5:短大入口

短大開設後も私学全体の発展に力を尽くし、一九五三(昭和二八)年公布の「私立学校教職員共済法」に合わせて、私立学校教職員共済組合の設立に關与したほか、一九五四(昭和二九)年には、日本私立短期大学協会の副会長、東京都私立短期大学協会の初代会長に就任した。さらに、一九五六(昭和三一)年には市ヶ谷の私学会館の建設に尽力したほか、私学功労者として「藍綬褒章」を受章している(写真6)。

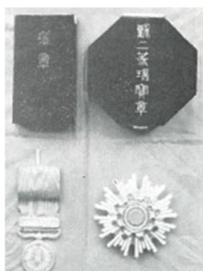


写真6:藍綬褒章

このように、学校の経営のほか、学外の役職をつとめるなど慌ただし

日々が続いていたが、一九六五（昭和四〇）年、小野は慶応大学病院において亡くなった。享年六七。同年一月二八日、学校法人立正学園ほか六団体による葬儀が執り行われ、学園のみならず教育界における小野の人望、人徳をうかがい知ることができ（写真7）。



写真7：学園葬の様子

小野の死から一年後、一九六六（昭和四一）年に立正女子大学が設置され、家政学部が設けられた（写真8）。一九六九（昭和四四）年に教育学部、一九七六（昭和五一）年には人間科学部が新設されるなど、次々に学部が拡充されていった。同年には大立正女子大学から文教大学に、一九八三（昭和五八）年には学校法人立正学園から学校法人文教大学学園に変更されたのである。



写真8：立正女子大学遠景

このように、小野の遺志を引き継ぐかたちで、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・短期大学・大学を有する総合学園が、一九六〇年代後半に完成したのである。小野が目指した一連の学園の整備はこのように実現し、同時に建学の精神も確実に引き継がれていった（漫画本編七一ページ）。ただし、建学の精神である「立正精神」という用語は抽象的であるため、それに代わる言葉が学内において検討されるようになり、立正女子大学第二代学長の小尾席雄により、「立正精神」が「人間愛」と読み替えられ、生徒、学



生のみならず教職員にいたるまで広まっていくのであった（文教大学学園創立九〇周年史編集委員会『文教大学学園創立九〇周年史』二〇一七年、一〇一〜一〇二ページ）。

馬田と小野が、女子教育という理想を掲げ学校の設立に奔走し、その結晶として、一九二七（昭和二）年に立正裁縫女学校が誕生した。馬田は研究者であると同時に教育者として小野を導き、また学校設置後は経営者としての手腕を発揮した。小野の場合は、学校設計画の最中に姉が他界し、女子教育の実現に尽力し、その熱量、情熱により初めて学校が誕生したのである。馬田と小野は強い信頼関係で結ばれ、同時に教員と学生という立場を超えて尊敬できる関係であり、これこそが「人間愛」を象徴する出来事である。馬田、小野の強い意志が込められた「人間愛」の精神を継承し、これからも文教大学学園は歩みを進める。